

街道
と
曲人

二
十
八

街道をゆく

二十八

司馬遼太郎

朝日新聞社

昭和六十一年十一月三十日 第一刷発行

街道をゆく 二十八

定価 一三〇〇円

著者 司馬遼太郎

発行者 八尋舜右

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地 五十三十二

電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

©司馬遼太郎 一九八六年

ISBN4-02-255548-3
Printed in Japan

街道をゆく

二十八

本書には「週刊朝日」昭和六十一年三月二十一日号・連載第七百十六回から、九月十九日号・第七百四十二回分までを収録。

目次

耽羅紀行

常世の国

焼跡の友情

俳句「颱風来」

三姓穴

7

21

35

51

塋域の記

67

石と民家

81

“国民”の誕生

95

郷校散策

111

士大夫の変化

127

北から南への旅

143

父老とカプチャン

159

神 仙 島

175

モンゴル帝国の馬

191

森から草原へ

205

お札の顔

219

朝天里の諸霊

231

不滅の風韻

243

思想の惨禍

255

車のはなし

269

故郷

283

虎なき里

297

憑きもの話

311

近くて遠い

325

シャーマン

339

泉靖一氏のこと

赤身露体

『延喜式』のふしぎ

383

369

353

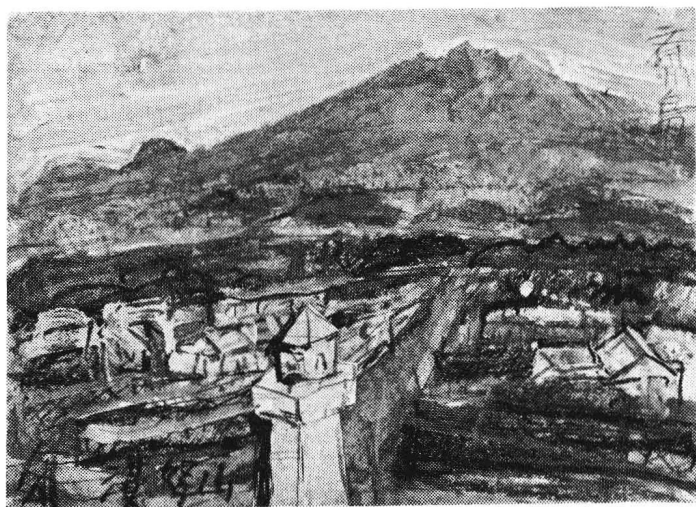
題字 棟方志功

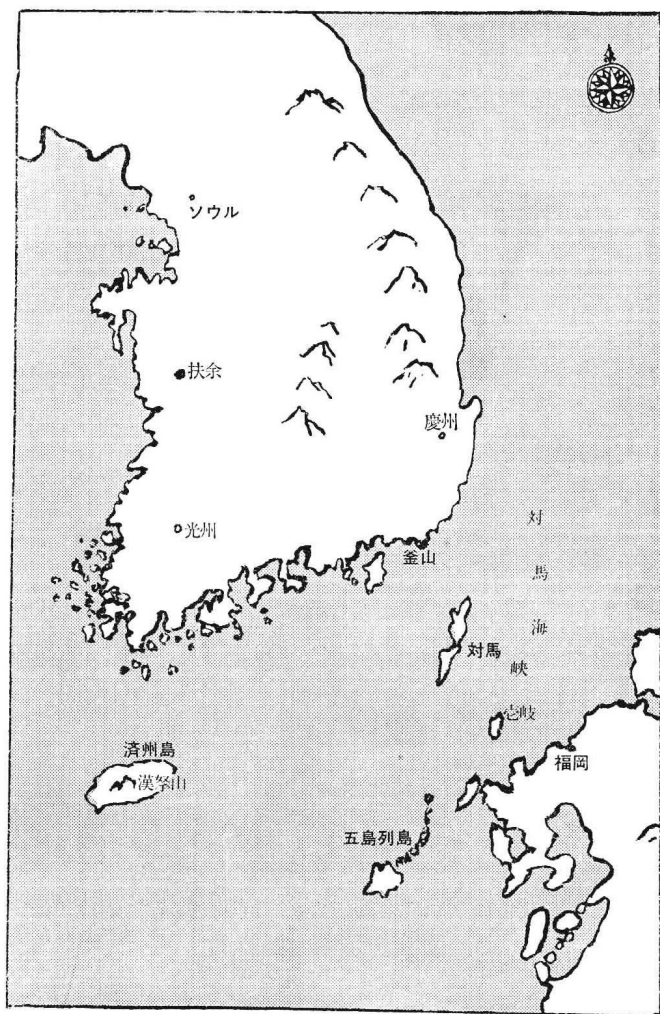
え 須田剋太

装幀 原弘

地図 熊谷博人

常世の國





気分を、うらうらと古代にさかのぼらせてゆくと、童心がおこる。

そういう童話の海を、田道間守^{たじまもり}という人が、航海している。ゆくべきは、常世^{とこよ}の国である。日本の古代人にとって、不老不死の仙境というのは、遠い海のかなたにあるとされていた。その国のことを、古代人は、常世の国とよんでいたのである。むろんそれがどこにあるのか、特定することはできない。

田道間守というひとは、古代の大族である三宅連^{みやけのむらじ}の始祖とされるひとで、実在していたかどうかは、わからない。ともかくも、三宅連の族人たちが、

「わが始祖は田道間守」

となえていたことは『古事記』や『日本書紀』で推察できる。八世紀初頭、上の二つの史書が編纂されたとき、他の氏族たちにもそうさせたように、三宅連にもその氏族伝説を書いてさしさせたはずである。ついであるがら三宅連は、朝鮮半島から渡来した天日槍^{あめのひばこ}の子孫とされる。

田道間守については『古事記』にも『日本書紀』にも出ている。『日本書紀』の「垂仁紀」に、天皇がおそらく侍臣だったかと思われる田道間守に「常世の国へ行つて非時^{ときじく}の香菓^{かくのみ}を求めて来よ」と言いつけたというのである。

田道間守は命に従い、常世の国に行ってもどってきたが、すでに天皇は崩^{かむあが}りしてこの世のひとではなかった。田道間守は陵前で悲しみ「叫^{おら}び哭^なきて自ら死^まれり」と、『書紀』にある。

田道間守がもちかえった「トキジクノカクノミ」というのは『書紀』では「今橘たちばなと謂いふは是これなり」というのである。

これは『書紀』の筆者の早合点で、橘というミカン科の木は、西日本の暖地の野生種なのである。つまり、わざわざ常世の国からもち帰る必要はない。この野生の橘はユズほどの実がなり、カグノコノミといえるほどに香気がつよい。ただ、すっぱくて食用にならない。ひょっとすると、田道間守は食用になる柑橘類の一種をもちかえったのかもしれない。「トキジク」とは、いつでもそのようにある、という意味である。「カグノ」というのはかおりたかい、ということで、花も実もまことに永く香かおつてめでたい木なのである。

田道間守と「橘」という伝説は奈良朝時代にはよく知られていたはなしらしく、

「橘は常世の国の木」

ということ、貴族の屋敷にはかならず植えられる木とされていた。この風は平安時代にもかすかに遺って、御所の紫宸殿しえんの前庭に、かならず植えられた（左近さこんの桜、右近うこんの橘）。

さて田道間守は『書紀』によると「万里の浪を踏ふ」んで絶域にいったという。そこは神仙の秘境でもあるという。

——朝鮮の済州島だったのではないか。

という説がむかしあって、べつに実証性はないものの、私などはトキジクノカグノコノミといえあのかたがうかぶというふうには、自分勝手の童話のなかにこの島を

ひき入れていた。

田道間守が、日本国内でこの実をさがしたのではないことは『書紀』の文脈で理解できる。その上、渡来系のひとだから、朝鮮へゆくことについては、おそらく身近な感覚だったのだろう。

ただし、朝鮮本土では柑橘類は育たない。ただひとつ、その南端の海上にうかんでいる済州島だけは、適地なのである。ここは、解放後、日本から蜜柑みかんを移植して、全島蜜柑畑になっており、韓国本土の蜜柑の需要を一島でまかなっているというから、古代にふるい形の柑橘類が自生していたとしても、おかしくはない。

私にも、若いころからそこへ行ってみたいという念願の地があった。

モンゴル高原と、ピレネー山脈（フランスとスペインの国境）のバスク地方については、すでに思いを果たした。残るのはアイルランド島とハンガリー平原と済州島である。

「藤谷さん、その三つのうちのどちらかへゆきましよう」

と、おおざっぱなことをいったのは、一昨年の秋だったように思う。アイルランドは、ヨーロッパの古民族であるケルト人がつくったふるい国で、アングロ・サクソンから数百年の支配と搾取をうけつつ、独特の幻想と文化を育ててきた。ハンガリーは、言語的には私どもにとって遠からぬ仲間の国である。ウラル・アルタイ語族のうちのウラル語をもつ民族が、遊牧しつ

つ西へゆき、ハンガリー平原に達してヨーロッパ文明の中にまぎれこんでしまった。

あれやこれや考えているうちに、アメリカにゆくことがあり、数週間の旅は氣骨が折れた。帰国したあと、その反動のように、アジアのどこかにゆきたいという渴えがおこり、もはやこれは済州島であらねばならぬと思い決めた。

ひとつには、平素、さほどに用もない『日本書紀』を、何かのことでひらくたびにこの島の名が出てきた。こういう偶然がつづいて、旅ごころをおさえかねてもいたのである。

古代、南朝鮮と北九州あたりは、共通の単語が多かったのだろう。

「ラ」

という音が、国・地方をあらわすことばだったのであるまいか。古代、いまの唐津市付近一帯らしい地域がマツラ（末羅・末盧・松浦）とよばれていた。『魏志』の「倭人伝」に、

又、一海ヲ渡ツテ千余里、末盧国ニ至ル。四千余戸有リ。山海ニ浜シテ（すれすれに）居ム。草木茂盛シ、行キテ前ナル人ヲ見ズ。

これは、末盧国の光景である。以下、末盧国のひとつの生産生活についてのみごとな一行がある。

好ンデ魚鰈さかなあひびヲ捕へ、水ノ深淺トナク、皆沈没シテ之ヲ取ル。

「倭人伝」は、倭人一般についても、似たようなことを書いている。倭人は断髪していれずみをし、そのいれずみで海中の大魚の害を避けている、という。その水人は「好ンデ沈没シ、魚ぎ蛤かヲ捕フ」というのである。

ちょっと主題が外れつつある。

「ラ」のことについて話をつづけねばならない。南朝鮮の古代に、小国として伽羅か(伽倻)という国があり、古代日本とのゆききがとくに頻繁だった(古代日本では任那じんともいった)。

さらには、新羅しん(しらぎ)という国もあった。

ところで、济州島のことである。朝鮮音でいうと、チェジュドである。こういう名称にかわったのは十三世紀末のことで、それまでは、

「タン(タム)」

あるいはトムといった。漢字は、耽羅、耽牟羅たむら、屯羅とんなどといったふうに当てている。

『日本書紀』では、主として、

「耽羅」

で、ふつう、たむら、というルビがふられている。要するに、済州島は、古代、耽羅という独立国だったのである。

独立国とはいえ、強国の百済くだらに牽引されるところが強かったらしく、やがて、百済の力がよわくなると、新羅の勢力下に置かれた。ついながら百済は耽羅を属国にすると、羅が国をさすことをきらってか、耽津たんとと変称させた。津しんは、みなとをあらわす。いかにも地方的な名前に変えられたのである。さらに高麗朝の末期（二二九一年）に「済州」というふうに、州の字をつけて行政区そのものの名称に改称させられた。みな島人の意志ではない。

古代の耽羅のころは、言語と風俗において、きわだって独立性をもっていたように思える。ただその実態は、いまとなればほのかにしかわからない。

しかし、その後となると、濃密な朝鮮国家の一部になってゆき、こんにちとなれば、済州道という一つの道なのである。韓国における道という行政区画は大きい。ところが、済州道は、慶尚北道、全羅南道といったような諸道からみると、面積・人口ともに何分の一か——日本の香川県ほどの面積——にすぎないのに、一道をもって遇せられている。国立の総合大学（済州大学）まで所在しているのである。

かつての耽羅である済州島が、色濃く朝鮮文化に塗りかさねられてゆくのは、おそらく李氏